

韋 いへん 編

愛知大学図書館報

No. 34

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、
なめし皮の紐でとじた上古の書物。

「知」の守り人

名古屋図書館長 松岡 正子

図書館は生き残れるか？昨今、この言葉をしばしば耳にする。図書館好きの1人としては、誠に心外だ。大学院時代の恩師は、「本は読まなくていい、ただし毎日触れるように、そうすればそのうち何かがわかるようになる」とよくいっておられた。学生時代、私はこの言葉を額面どおりにうけとって、毎日、母校の図書館の中をブラブラしていた。やがて書庫にはどこにどんな本があるのかおおよそわかるようになり、図書カードを引かずにはほとんどの調べ物ができるようになった。時には迷ったり、なかなかたどり着けないこともあったが、思いがけない拾いものに出会うことも少なくなかった。



しかし就職して講義や原稿のバッチ、学務などに追われるようになり、そのうえ老いも加わってくるとすっかり疲れてしまった。今は、図書館のOPACなしでは一步も進めない。データベースもリンク集も、とても便利だと思う。CNKI（中国情報データベース）が導入された時は、本当にうれしかった。一部だとしても最新の情報がわかるし、本文をすぐにプリントアウトできる場合もある。昔、何時間もかけてそれでもなかなかわからな

かったことが、アッという間だ。GeNii（国立情報学研究所の学術コンテンツ・ポータル）には、研究者についていえば興信所以上の情報量があり、全国規模の総合目録データベースの威力を思い知らされる。図書館HP

では、実践女子大のそれがとてもよくできていて、作成者に感謝しながらたびたびお世話になっている。

これらに比べてYahoo!やGoogleは、情報量は膨大で便利だが、時に煩わしい。情報の質が玉石混交で、整合性のある情報から順に並

んでいるわけでもなく、一応あけてみないと気がすまない者にとっては量が多すぎて疲れる。情報の交通整理がなされていないということは、良くもあり悪くもありだ。今の学生は、検索の第一歩をこれらで行っている者が多く、たいへんだ。どれが上質の情報なのか、その判断基準もわからないまま、いかにもといった感じで切り貼りしたレポートを作成してくる。昔の学生は、ブリタニカや平凡社などの百科事典から始めるしかなかったのが、情報の量ははるかに少ないが、質的には大きなハズレが少なかったと思う。

*

図書館のあり方が変わってきているという。情報の媒体が紙から電子へと大きく移行しつつあることで、情報量が格段に増え、図書館なしでも情報の受信や発信ができるようになった。名古屋図書館もパソコン・エリアはいつも盛況だが、閲覧室は人がまばらで閑散としている。パソコンは、すでに多くの場合、ノートと鉛筆に取って代わっており、情報資料をネット上や書物の両方から集めてそのままパソコンにとりこみ、あるいは打ち込んで整理し、レポートや論文を作成するようになった。そのためノートパソコンの使えない閲覧室の机は使いにくい。車道のロースクールの図書室を見学して、驚いた。図書室とキャレルが同じフロアーにあって自由に行き来でき、しかも24時間使える。名古屋図書館も全館開架式で利用が楽だが、さらに一歩進めて、ロースクール式の個人ブースの設置や24時間の利用などを一部でよいので導入していただきたい。

＊ ＊

名古屋図書館長になってよかったと思うことが2つある。

第1は、図書館を内側から少しのぞけたこと。人員削減の中、職員の皆さんはとても忙しい。しかし日常の応対や個々の問い合わせに対する説明は、丁寧で柔軟だ。レファレンスに駆け込めば親身に相談にのってもらえるし、外部からの取りよせも素早い。学生たちは、名古屋図書館の応対はどこよりも「心優しい」という。サービス業なんだと感心する。何よりも心強いのは、今、学生たちに最も必要な「情報の活用法」、すなわち「検索技術の獲得」のために積極的な働きかけがなされていることだ。1年生の入門ゼミでの図書館ガイダンスや、ゼミ単位で実施されている2～4年生向けの資料・情報検索ガイダンスなどである。学生たちには、「該

当件数0」という壁を突破するための発想法や技術をしっかり身に付けてほしいと思う。

第2は、電子情報が氾濫する情報社会の中で、図書館はどうなるのか、「知」はどのように伝えられていくのか、ということを考える機会を得たことだ。といっても、それを口実にいつもとは少し違う場所にでかけ、違うものを搜したというにすぎない。全国図書館フォーラムや大学図書館長会議に出かけて何が問題になっているのかを聞き、全国各地の大学や機関の図書館で行われているサービスや検索ガイダンスをHP上で探ってみた。『図書館のプロが教える＜調べるコツ＞―誰でも使えるレファレンス・サービス事例集』や、京都大学全学共通科目講義録『大学生と「情報の活用」情報探索入門〔増補版〕』も読んでみた。この京大講義録によれば、当面の課題として、図書館においては分担収集や共同保存図書館の設立、情報の共有化、学生については検索技術の取得と情報の活用などがあげられており、教員に対しても選書や企画に関する責任が指摘されている。

では、将来、電子図書館が主流になった時、本という媒体はどうなるのか。私は中国民俗学を専門としているので、ホンモノの持つ力を強く信じている。本は、情報の媒体としての役割は減っていくかもしれないが、モノとしての価値は増していくだろう。電子媒体がもし現物の代替としてしか使われていなかったとしたら、ホンモノに勝ることはない。図書館はホンモノの「知」の守り人であり、本の博物館という形の図書館もありうるかもしれない。ただしその時にはすべての書物、図書館が厳しい淘汰に直面することになる。個性のある図書館、すなわち独自のモノ、あるいはある分野に集中した群体を形成するモノをもたない図書館は、生き残れないだろうと思う。